児童の道徳性意識調査と年間指導計画の改善

足利市立富田小学校道徳研究部
研究主任　春　山　善三郎

1. はじめに

昭和46年度から新教育課程が実施され，道徳教育においても改訂の趣旨を生かした全体計画の改善の必要性にせまられた。

道徳教育は，学校・家庭・地域社会のあらゆる場合を通して行うべきであるという原則に立っていつ，どこで，何を指導するか，より意図的，具体的な全体計画をねり直す必要があるのはいうをまたない。

本年度は，はからずも本校は市教育委員会から道徳教育研究学校に指定された。これを機会に全体計画，年間指導計画の改善にとりくもうとしたのである。

2. 改善の視点

(1)　年間指導計画の改善

(2)　他領域との関係

(3)　学校・家庭・地域社会との連携を密にする。

(4)　全体計画の構想

3. 改善の手順

児童の道徳性を的確にはあくする。

児童の道徳性に関しては，「道徳的判断力，道徳的心情，道徳的態度および実践意欲など……」と，小学校指導書（道徳編）に述べてある。児童の道徳性の傾向を明らかにすることがまず第一に大切であると考え，「新道徳性検査」（日本図書文化協会）あわせて児童の家庭における道徳的環境の実態をつかむために，父母の見る「道徳性アンケート」を実施した。

上記の二つの調査および教師の観察をもとにして，重点目標を設定し，各学年の結果から，学年の努力点を設定しようと試みた。そしてそれらを基盤として年間計画の改善の資料としたのである。

(1)　道徳性検査

この検査は，道徳性を"道徳的心情"と"道徳的判断力"を骨子として構成され，また"主として個人としての道徳"と"主として社会成員としての道徳"の二つの領域に分けることができるという考えに立脚して構成されている。その上，個人と学級，学年について，道徳性の発達の実情を診断できる。

ア　結果の解釈

・偏差値および五段階評定による道徳性の発達の概観

学　年	1	2	3	4	5	6
偏差値	47	50	47	48	53	60
評　定	3	3	3	3	3	3

評定では全学年とも3で普通であるが，1・3・4年が偏差値50を下まわり，ややおちる。

・診断プロフィールによる解釈

個人道徳の心情・判断と社会道徳の心情・判断ともに同じような発達をしていると考えられる。3年は，個人道徳の心情の発達が劣り，他は普通の程度と考えられる。

・学年集計表による解釈

全国基準と大きくずれるものを各学年とも示すと次のようになる。

1年

	1	3	④	⑦	⑨	18	21	24	26
0点	+13			−13	−18				
2点	−20	−21	+21	+17	+17	−33	−21	−26	−21

2年

	8	12	18	㉒	24
0点	+10	+16	+11	−6	+4
2点	−15	−10	−16	+20	−26

3年

	1	3	8	9	13	15	21	26
0点	+9	+25	+12	+13	+32	+28	+12	+10
2点	−20	−20		−22	−28	−17	−10	

4年

	12	15	⑲	23
0点		+12		+12
2点	−19	−11	+25	−16

5年

	⑨	15	⑯	㉓	㉔
0点		+15	−15	−11	
2点	+21	−32	+11	+19	+22

6年

	4	5	⑫	⑰	19
0点		−12			−11
2点	−22	+20	+27	+30	

各学年の問題と思われるもの，すぐれていると考えられるものを示すと次のようになる。

	問題と思われるもの	すぐれていると思われるもの
1年	1 健康安全	4 きまりある生活
	3 整理整とん	7 忍耐
	18 尊敬感謝	9 節度節制
	21 規則の遵守改善	
	24 家族愛	
	26 国際親善	
2年	8 思慮反省	22 権利義務
	12 努力向上	
	18 尊敬感謝	
	24 家族愛	
3年	1 健康安全	
	3 きまりある生活	
	8 節度節制	
	9 明朗快活	
	13 勤労	
	15 動植物愛護	
	21 権利義務	

	問題と思われるもの	すぐれていると思われるもの
	26　国際親善	
4年	12　創意くふう	19　寛　容
	15　動植物愛護	
	23　家族愛	
5年	15　正義勇気	9　明朗快活
		16　親切愛情
		23　家族愛
		24　愛校心
6年	4　自主自律	12　努力向上
	5　誠　実	17　信頼友情
	19　寛　容	

問題点を低・中・高別にみると，低学年では家族愛と尊敬感謝が，中学年では動植物愛護があげられる。全体をみた場合，健康安全，尊敬感謝，家族愛，国際親善が問題点と考えられる。

(2)　道徳性アンケート

この調査は，昨年度柳原小学校で実施したものを，そっくりそのまま借用したもので，柳原小のご指導をいただき実施したものである。

ア　調　査　項　目

指導要領に示されている３２項目にわたるものである。

イ　調査の対象

本校の全児童（４０２名）の両親を対象とした。調査項目についての判定は，地区の児童全体から判定するのではなく，あくまでも自分の子どもをみて判定してもらうことにした。また両親が別々に判定するのではなく，父母の協議の上で判定してもらうようにした。

このような調査をすると，ともすると，通信票の成績にかかわりがあるかもしれないという考えから判定が甘くなりがちなので，ＰＴＡ学年部会の席上でその趣旨を説明し，また文書でも各家庭に知らせ協力を頂った。

ウ　判定のし方

各調査項目に「よい」「ふつう」「わるい」の判定欄を設け，その項目については，まあよいだろうという考えのものは「よい」欄に○をつける。またこの項目についてはどうも思わしくないというものは「わるい」欄に○をつける。どちらとも言えない，その時によってよいこともあれば悪いこともあるというものについては「ふつう」欄に○をつける。

以上のような条件で判定をし，各欄に○印をつけてもらったのである。

エ　分析の結果

・父母の反応

全校　「よい」に反応率が高かったもの。

健康安全　時間の尊重　正義勇気　敬けん　創意くふう　親切同情
信頼友情　規則の尊重　権利義務　愛校心

「わるい」に反応率の高かったもの

整理整とん　不とう不屈　節度節制　礼儀作法　探求心　向上心

学年　「わるい」に反応率の高かったもの

1　年	2　年	3　年	4　年	5　年	6　年
礼儀作法	礼儀作法	整理整とん	整理整とん	整理整とん	整理整とん
不とう不屈	整理整とん	不とう不屈	不とう不屈	不とう不屈	不とう不屈
節度節制	節度節制	節度節制	節度節制	節度節制	節度節制
探求心	不とう不屈	向上心	探求心	探求心	探求心
	探求心	探求心	愛校心	勤　労	国際親善

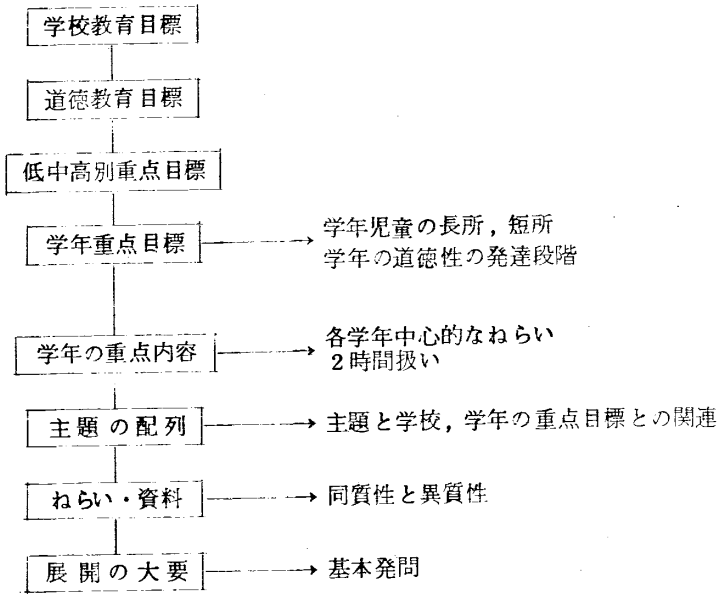
・教師の反応　（担任クラス全児童をみて判定）

「わるい」に反応率の高かったもの

不とう不屈　思慮反省　自由と責任　自主自律　礼儀作法
物金銭の活用　向上心　探求心　愛国心

4. 指導計画の改善

道徳性検査，道徳性アンケートによる本校児童の道徳性がうきぼりにされてきた。これに教師の観察を加え，次の手順で年間指導計画の改善を図った。



主　題　配　当

上記の手続きを経て年間指導計画の改善をしたのであるが，その一部主題配当を右記する。

学年＼項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	◎	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎	○	○	○	◎	○	○	◎	○	○	○	○
2	◎	○	○	○	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	◎	○	○	○
3	◎	○	○	◎	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○
5	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	◎	◎	◎	○	○	○	◎	○	○	○	○	○
6	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎

5. おわりに

児童の道徳性の実態の上にたって，年間指導計画の改善は，一応なしおえた，といっても未だ十分のものとはいえない。さらによりよい指導計画を作成しなければならないと考えている。この研究を通して児童の実態を知ることがいかに大切であるかを痛感した。質問紙法によるもの，累加記録によるもの，観察によるもの，児童と話し合うこと，いろいろな方法が考えられる。

しかし，何よりも教師と児童の心のふれあいが大切である。心のふれあいの場，そうした時間はなかなかとりにくいものではある。しかし，意志のあるところに方法ありとか，給食，清掃等の時間，あるいは休み時間，廊下でのたちばなし，考えれば案外あるものである。あらゆる方法を通しして児童を知るように努めるように心がけていきたいものだと考えた。

評

道徳の時間の年間指導計画の立案にあたっては，「児童の興味，関心，欲求や生活経験に即して，その道徳性の実態を正しくとらえること。（小学校指導書道徳編）」が大切であるといわれている。

富田小学校は児童ひとりひとりの道徳的行為を可能にしているものは，道徳的意識であるという観点に立って「道徳の時間の年間指導計画の改善の資料」とするとともに「道徳の時間の指導の充実をはかる」ために，総合的な実態調査を試みられたわけである。特に，調査目的を明確におさえるだけでなく，それぞれの調査のもつ限界を確認して諸調査を有機的に組み合わせて，児童の道徳性の全体的傾向とともに質的な深まりのある調査結果をまとめられたことは，まことに卓見であり，その成果は高く評価されるものであろう。

いうまでもなく，意識と行動との間には，だれしもズレがあるはずである。富田小学校が教師の観察による調査を継続的に実施しているのはこの点についてのきびしい認識の結果と解釈したい。

さらに，ひとりひとりの児童を生かす道徳の授業，あるいは，生き生きとした道徳授業はいずれも的確にとらえた児童の道徳的な考え方，感じ方の実態の上にのみ展開可能となるものである。その意味でも富田小学校が児童の道徳性の実態は握を過去の一時点におけるものとだけしないで日常の教育活動の中で地道な調査累積を心がけていることを，あわせてここに紹介しておきたい。